

滋賀県文化情報

『えんむすび』

●アール・ブリュットネットワーク
をご存知ですか？

近年、注目が高まっているアール・ブリュット。「加工されていない生(き)のままの芸術」という意味のフランス語ですが、全国各地で作品が見出され、多くの展覧会が開かれるようになっていきます。

日本において、アール・ブリュット作品の多くは、障害者福祉の現場で生み出されています。また、無名の人の作品が、審美眼を持つ人に探し出されたり、全くの偶然で見出されたりしてきました。誰かに見せる目的でつくったわけではなく、静かに存在する作品たち。世に出て行くためには、多くの関わりを必要としています。

県では、アール・ブリュットに携わる美術、福祉、医療、研究機関、行政等各分野の関係者間の交流を促進し、情報発信などを行うことにより、アール・ブリュットを支える環境全体の底上げを図るため、2013年2月にアール・ブリュットネットワークを発足しました。多くの皆様のご参加

をお待ちしております。
（会費無料）

詳しくはホームページ「アール・ブリュットネットワーク」をご覧ください。
<http://www.pref.shiga.lg.jp/a/kikaku/art-brut/network.html>

●外国人向け滋賀文化情報誌
【COOL SHIGA】発刊

滋賀県では、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を、滋賀の豊かな文化の魅力を発信する絶好の機会ととらえ、県内のさまざまな機関・団体と連携して、文化活動の一層の活性化と地域の活性化に向けて、文化プログラム の推進に取り組みんでいます。

また、近年のわが国への外国人旅行者の増加で、県内においても有形・無形の文化財や芸術、食など、さ



さまざまな文化を鑑賞・体験される方が増えています。

こうした中、県では、より多くの外国人に滋賀の魅力を知っていただき、積極的に発信していただきたいの思いから、外国人旅行者や県内在住の外国人向けに、滋賀の文化について英語で紹介するタブロイド誌「COOL SHIGA」を発刊いたしました。

誌面では毎号特集テーマを設け、滋賀の文化の魅力を丁寧にお伝えしています。そのことで、滋賀の文化や歴史に関心を持っていただくとともに、本誌を手にした方が誰かに紹介したくなるような読み応えのある誌面づくりに取り組んでいます。

第1号では、国宝彦根城や井伊の赤備え、甲賀忍者を紹介し、第2号では、海外でも人気の高い紫式部「源氏物語」にゆかりの石山寺や滋賀の仏様を取り上げ、観光ガイド本では書かれていない内容を紹介しています。

本タブロイド誌は、県内の文化施設や宿泊施設をはじめ、京都市内の宿泊施設、東京日本橋にある滋賀県情報発信拠点「ここ滋賀」などで配布しています。

ぜひ一度手にとってご覧いただき、外国人へのご紹介など、情報発信へのご協力をお願いします。

Made in Shiga - 身近に感じる「美」の世界

近年に実施された「暮らしアート事業」の中から地域を元気にする主な取り組みを紹介しします。

●「つま・じつ」びわ湖から発信するアートとCAF.Nびわ湖展」

CAF.Nびわ湖実行委員会副代表・彫刻家 藤原 昌樹

CAF.Nびわ湖展は、2010年から大津市歴史博物館で毎年開催している現代美術の展覧会です。9回目となる「2018CAF.Nびわ湖展」は、2018年9月16〜26日の会期で開催し、専門家だけではなく、地域の方やデイサービスセンター、教育機関など、多くの方に現代美術に親しんでいただきました。現代美術は、難解な印象を持たれがちで

すが、専門知識がなくとも人間の本能（感じる心）で楽しむことができる、日常のすぐそばにあるものなのです。アーティストは、素材と対峙し、基本的な技法はさることながら応用力を駆使し、柔軟な思考を持って、時には精神的に極限まで追い込むなど、あらゆる方法で作品を制作し続けます。彫刻や絵画、具象や抽象など表現方法はさまざまで、大きな空間にそのさまざまな表現が混在することで刺激し合います。鑑賞者には、非日常の環境で好みの作品を探したり、想像力を膨らませたり、素材を観察したりと、作品から発せられるアートの力を感じながら楽しんで

いただけると思っています。「CAF.Nびわ湖展」の「CAF」は「Contemporary Art Festival」の略称、「N」は「Nebula」の頭文字で、星雲や銀河の意味。現代美術が星雲のごとく広がり、銀河の渦のようにたくさんの人や地域をアートに巻き込むことができたらという思いから名付けられました。本展の歴史を週れば、埼玉県立近代美術館において1978年より毎年開催されている「CAFネブュラ展」から派生しており、関東在住作家から「琵琶湖の畔で展覧会がしたい！」との声があがったことがきっかけで、滋賀在住作家が中心となり実行委員会を発足しました。他と同じことをするのはなく、滋賀の持つ文化力、琵琶湖から発せられる生命力を自然な形で受け止め、アーティストの視点で表現し、様々な関係性を築きながら地域と共に成長する場所が「CAF.Nびわ湖展」なのです。時の流れに寄り添い変化し続けるのが芸術ですが、その瞬間を捉え、作品として明確化することも重要です。その瞬間に気づき、吟味できる環境をつくりあげるのも大事な役割だと考えています。現在、藤樹の里キッズアートと連携し、学校では体験できないアートプロジェクトも進めています。継続は力なり。あぐらをかくことなく、新たな挑戦と希望に繋げ、地域と共に「感じる心」を育み続けられるよう精進します。



アートのみかた

— 滋賀県立近代美術館所蔵作品をもとに —



杉田静山《花籠 潮騒》1971年 竹 32.2×64.0cm 滋賀県立近代美術館所蔵

●野洲の自然にはぐくまれた 独自の境地

滋賀県立近代美術館学芸員 和澄 浩介

ゆりかごのようなフォルムが印象的な花籠。野洲の竹細工作家杉田静山（1932年～2017年）の「花籠 潮騒」です。

包み込むようなおらかさと、温かみのある竹ひごの肌が優しい印象を醸し出しますが、細かく見ると、左右対称の部分にはほとんどどなく非常に複雑な形に編み上げられ、きわめて繊細な編み目も数種類の技法が駆使されています。おおらかさと繊細さ、一見水と油のような特性を見事に融合させた逸品です。

作者の杉田静山は、大阪市に生まれます。12歳の時に病で聴覚を失い、13歳になると戦火で両親の故郷であった野洲に移り住みました。そこで出会ったのが、野洲川の周辺に繁殖する竹を用いた竹細工です。静山は特定の師につかず独学で竹細工の技法を学び、高い技術と独自性を修めていきました。本作は、野洲の自然の恵みから生み出された素材が、唯一無二の技術によって昇華された静山の代表作と言えます。

オペラ日和

● 名作オペラの愉しみ 林光作曲 オペラ《森は生きている》公演

びわ湖ホール事業部 チーフ・プロデューサー
舘脇 昭

1月19日(土)、20日(日)の二日間、林光作曲の名作オペラ「森は生きている」を中ホールで上演します。この作品は日本語の内容が良く伝わることで定評のある「オペラシアターこんにゃく座」のために故林光さんが作曲したもので、1台のピアノと12名の歌手で上演すること、という条件が付けられています。

びわ湖ホールではこの作品を、当時の芸術監督若杉弘さんの提案により、声楽アンサンブルの設立後間もない2000年に初演しました。日本語を分かりやすく発語する発声方法は、西洋のオペラの発声を目指していたメンパーの理想とは異なっており、メンパーから相当な反発の声がありました。ところが、練習を重ねていくうちに、誰でも口ずさめるメロディーと物語の持つ厳しくも温かいメッセージ性、また、びわ湖ホール独自の吉川和夫のアレンジが冴える管弦楽での上演、そして本番での客席の反応などを通して、メンパーたちの受け止め方に変化が生じ、今ではこの作品をこよなく愛し、大切なレパートリーとして受け継いでいます。

初演から9年の時を経て、びわ湖ホールで「森は生きている」公演を自ら指揮された林光さん

が、「初演当時若杉さんから、管弦楽上演と声楽アンサンブルの全員が出演できるように16名の歌手による上演、という二つのお願いがありました。管弦楽上演は了承しましたが16名での上演はお断りしました。今回声楽アンサンブルの活動に触れ、16名での上演もOKしておけば良かった。後悔しています」と話されました。若杉さんの当初の思いが通じた瞬間でした。

大晦日に心優しい少女とわがままな女王の二人に起こった奇跡の物語、オペラ「森は生きている」にどうぞご期待ください。



2012年びわ湖ホール公演より (指揮：林光)

● オペラの楽しみ方 (番外編) 邦人作曲のオペラで楽しむ

オペラは西洋のもの、というイメージがありますが、日本人による優れた作品もたくさんあります。團 伊玖磨「夕鶴」「ひかりごけ」、黛 敏郎「金閣寺」「古事記」、芥川也寸志「ヒロシマのオルフェ」、林光「セロ弾きのゴーシュ」「あまんじやくとうりこひめ」などなど。多くの作品が日本語で直接語りかけてくるので直感的に理解することができます。最近では日本語上演で日本語字幕付きという公演も増えてきました。

びわ湖ホール芸術監督の沼尻竜典も2014年に「竹取物語」を作曲しています。東京2020に向けて邦人作曲作品や、ジャポニスムを意識した作品も上演される機会が増えてくると思いますので、その際にはぜひお楽しみください。

オペラへの招待 林光作曲 オペラ《森は生きている》

日時 2019年1月19日(土)、20日(日)
両日 15:00 開演

会場 びわ湖ホール中ホール
指揮・ピアノ 寺嶋陸也

演出 中村敬一
出演 びわ湖ホール声楽アンサンブル
管弦楽 ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団

チケット 一般：5000円、
青少年(25歳未満)：2000円、
シアターメイツ：1000円
全席指定/好評発売中

お問い合わせは
びわ湖ホールチケットセンター
077-523-7136
(10時～19時、火曜日休館)